

玉藏の熊谷

大西重孝
齋藤清二郎

かしら、小道具解説並繪

文樂座の二月興行、晝の部も「一谷嫩軍記」が通し狂言の形式で序切敦盛出陣から陣門、須磨浦、組討、脇ヶ濱、陣屋と上演された。陣屋の覺書は本誌第四百二號に發表したが、今回は玉藏が熊谷を遣つて前回の榮三の場合と違つて隨所に珍らしい型が見られた、兩者を比較すると興味が多からうと物語の條だけを整理した、左手は玉德、足は紋之助で、相模は光之助と龜松との一日替り、藤の局は政龜、軍次は紋司である。申しおくれたが太夫は「物語」が呂太夫、仙糸、「首實檢」が大隅太夫、清三郎であつた。

本手何時ものところ屋體は陣屋の態にて眞

中に三段、軒下に向ひ鳩の紋をおいた幕をかける。正面六枚の黒塗骨の障子、上手筋かひ屋體、同じく黒塗骨の障子四枚にて仕切る。下手樓の大木、その根元に制札を立てその後下手一杯に逆茂木を打つた石垣。下手の横幕のところ木戸。

「日も早や西に」で上手の障子を開けて相模が眞中に進み「待つ間程なく」で坐つて正面向ふを見やつてから不安な心を包んで首を垂れる。「花の盛りの敦盛を」に續く「討つて無情を悟りしか」で横幕を開かせて、熊谷が現はれる。腕組みをして首を垂れ、右の手首には數珠をのぞかせてゐる。「物の……」で何

時ものところでトン／＼と正面となり「哀れを」で面を起して、上手を振返り「今ぞ知る」でクリリ後向けとなりトンと左足を後へ引いて、今を盛りと咲く櫻を見上げる。「思ひを胸に」で腕を解いて（この時數珠を消す）本手に上り「立歸り」で下手から屋體に入り、そのまゝ東に立つてから眞中へ進む内に、右へ首をひねつて相模を見すへるのが「妻の相模を尻目にかけて」で、眞中でトン／＼と正面となり、太刀を左手にとつて坐る、これより先き軍次が上手障子から出て、下手に兩手をついて夫を迎へた相模をかばふ位置に坐る。軍次は梶原が詮議の爲め石屋を連れて來たと語るのを熊谷は太刀を左手に斜に立てた形に持つて聞き「ムウ」と首を傾けて考へ「詮議とは何事ならん」と上手へ首をひねる「アいや其方は一獻催し」左の太刀を横にして前に出して眺め「梶原殿を蔑し申せ」となり、軍次を見やり「サア早くいけ／＼」と促す。軍次は立ち兼ねて相模と顔を見合せる「ハテ如何を猶豫する」と左から首をまはしてトンと極める、軍次は辭儀をして立上らうとする相模はその太刀の鐙をひかへて止めるが軍次は目で制し、眞中に煙草盆を出して上手障子

の内に入る。「跡見送りて」熊谷は軍次の去つた跡を見送つてから大きく下手の相模の方へ向直るのが「熊谷は」で、相模はその前へ軍次が出しておいた煙草盆を進める、熊谷は、「コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た、國元出立の節陣中へは便も無用と、堅く言付け置いたるに、詞を背くといひ」右手をひざに突張つて、相模を見据へ「剩へ女の身で陣中へ來る事、不届至極の女め」トンと左足から正面となり、後に残した首を正面に戻してトンと極る。「不興の體に相模はもち」以下の間に煙草盆をとつて稍々上手前に置き直し煙

管を左にとつて右手に移し軽く盆の縁に叩いてから左に刻み煙草をとつて詰め、火をつけて今一つ軽く叩いてから正面となる。相模の詞は進んで「百里餘りの道をつい都迄……」となり、熊谷は煙管を左手に持直して口に咬へて閉いてゐると「一の谷とやらで今合戦の最中」となるので、そのまゝ相模の方へ横目を引き肩を上げて思入れ。「子に引かされるは親の因果、御了簡下さりませア此小次郎は息災で居ますか」と相模は兩手について尋ねる。熊谷は煙管を下して吸殻を盆に叩き、「熊谷詞を荒らげ」で相模の方に向き直つて

煙管を持つた右手をひざにおいて「戦場へ赴くからは生命はなき物、堅固を尋ねる末練の性根」煙管を前について兩手を重ね「若し討死したら何とする」と上半身をのり出す。相模は「よき大將と引組んで」と云ふので、形を戻して、煙管を持つた右手をひざにおいて聞く。
「健氣な詞に顔色直し」で左肩を引いて満足の様を見せ「おゝ先づ小次郎が手柄といつば」と正面向ふを見る。この邊りから上手の障子を開いて藤の局が窺ふ。熊谷はつゞけて「平山の武者所と争ひ」右肩を引いて左手で上手

役名	かしら	髪	備考
熊谷次郎直實	文七	採揚、鵯口、 (奥)地毛の切髪	文七二個
妻相模	老けおやま	油付片はづし	
堤軍次	源太	油付武士髷	
藤の局	老けおやま	唐毛のすつぽり、髪鉢巻	
石屋彌陀六	鬼一	白のひつくり	
梶原平次景高	金時	油付切藁、矢筈烏帽子付	
源義經	動きの源太	油付、切藁、金冠付、	
軍兵	軍兵つめ		
百姓	百姓つめ		

斜の方を指差し「拔駆けの高名、軍門に駆入つての働き、手疵少々」と右の手首を左の手で二度軽く叩き「負うたれども、末代迄家の譽」とウレヒで首を垂れる。相模はすぐ「して其手疵は急所ではござりませぬか」と問ひかへすので「ッ、それ」と右手の煙管を前に差出して先の方を軽く二度揺り動かしてもう一度「それ」で少し前に引いて右へ拂ひ「まだ手疵を悔む顔は、若し急所なら悲しいか」と右手の煙管を立て、左肩の方へ傾けて左手をその真中の邊りに添へ首を右からまはして來て上半身を前に傾ける。相模は「かすり疵でも負ふ程の働きは、でかしたと思つて嬉しさの餘りお尋ね」と答へるので、正面となり煙管を左に持ち直し煙草盆に戻して上手へ押しやる。

相模の詞「其時お前も小次郎と一所にお出なされたか」で熊谷は相模を見やり「ホウ危しと見るより軍門に駆入り」左手で上手斜向ふを指差し「小次郎をむりに引立て小脇にひんだき」左脇に抱へ込む形をして見せて「我が陣屋へ連れ歸り、某は其軍に搦手の大將」正面となり「無官の太夫敦盛の首」兩手を左右に大きく展げ揃へて前に突出してから右手

を右ひざに、それから左手を大きく左ひざににおいて、「討つたり」と眉を一杯に引上げてトンと極る。

上手に窺つて居た藤の局が「我が子の敵」とトン／＼と走り出て、熊谷の上手におかれた太刀をとり上げ柄に手をかけて意氣込むと、熊谷はギツクリとなり「抜く所鎧欄んで」トンと右足を踏み出し局のつき出した太刀の端を欄で逆にひねつて柄頭を下におしつけると局の身体は前にめつて、太刀の爲めに押へつけられた形となり、熊谷は眉を一杯に引上げて寄せ目で極る。下手の相模は驚いてトン／＼と駆け寄り夫の腰にとりついて「聊爾なされな、あなたは藤の御局様」と注意をする、その顔を見てゐた熊谷は聞き終つてギツクリとなり「聞いて直賞」右の方から首をまはして來て局を見下し「惻りし」で大きくギツクリとなり、局を押へた太刀を引くと局はおき上つて今度は懷劍をぬいて斬つてかゝるので「ハッハッハッ／＼」と頭を交はし劍を避けてから太刀を局の前に投げ出し、真中に來た相模を局の前へトンと突出し「ハ、ハ、ハ」とトンと東に立つてから「こは／＼」トン／＼と大きく足拍子を入れてか

ら今度は軽くトン／＼と後へ退つて「思ひがけなき御對面」と坐り左手を上げてトンと右ひざを引き右手を上げてトンと左ひざを引き、更に兩手をついてから左手を頂いて頭を下げるのが「敬ひ奉れば」一杯である。

局は太刀を相模につきつけて「助太刀して夫を討たせ」と迫る。この間に熊谷は下手で正面となり兩手をひざにおいて首を垂れてゐる。相模は下手で「敦盛様は院のお胤と知りながら、どう心得て討たしやんした、様子があらう其譯を」と促すので左手に太刀をとつて斜に立て、持つて聞いてゐた熊谷は「ヤア愚か／＼」となり「此度の戦ひ」顔を正面にまはし、右手に軍扇を抜き取つて「敵と目ざすは平の宗盛、夫に隨ふ平家の一門、敦盛は扱置き」反り身となり「誰彼と鎧を削るに用捨がならうか」と身體をふるはせ「イヤノウ藤の御方」と勢よく上手の局の方に向き直り「戦場の僕は是非なしと御諦め下さるべし」と首を下げ「其日の軍の概略」と顔を正面に向けると共に軍扇で向ふを差し「敦盛卿を討つたる次第」と左の太刀の柄を軍扇で叩くと局が立上つて又もや懷劍を振りかざすのでウンと右ひざを進めると共に腕一杯に軍扇を局

の方へ突出して止め（眞横を見せた形）「物語
らんと座を横に構へ」で大きく正面となつて
尙も、左の太刀を横に構へて、右の軍扇を右ひ
ざに突いて眉を上げて極る（ツケ）。太刀を下
において「扱も去ぬる六日の夜、早や東雲
と明くる頃」で軍扇をバチリ／＼半ば開いて
は閉ぢて右手の上を見上げ「一二を争ひ拔駈
けの平山熊谷討取れと切つて出でたる平家の
軍勢」とひざを直して後へ退り「中に一際」
軍扇を前について兩手を重ねて向ふを見やり
「勝れし……」トンと右足を踏出して（ツケ）
軍扇をサツと開いて地紙の方を下に右脇に下
左手は袴の肩衣の端をしごき上げ、眉を一杯
に上げて見得となるのが「緋威」一杯である
（ツケ）。チンチンの合の手で左脇を固めてか
ら「さしもの平山あしらひ兼ね」右のつぼめ
た軍扇を大きく山形に動かして、前に突出し
「濱邊をさして」トン／＼と上手斜になりテー
ン／＼／＼の合の手に合わせて前に差出し
た軍扇を手綱の心で裏に返し表に返すと共に
トン／＼とひざを動かし「逃出す」と軍扇を
右へ流し乍ら正面にまはつて来ると尻を落し
左手を下について支へ、左から横一文字に軍
扇を下手斜に突出して極る（ツケ）。

身體を起して「ハテ健氣なる若武者や」と
右ひざを打ち「逃ぐる敵に目なかけそ、熊谷」
と軍扇で自分を指差し是に控へたり、返せ、
戻せ、ヲ、イ」と左手をひらいて左の頬にか
ざし「ヲ、イ」と軍扇をひらいて、右上へ輕
く二度にあほり「扇を持つて打招けば」と上
に大きくかざして極る。「駒の頭を立直し」で
かざし扇の要をかへして逆手に持ちトン／＼
と下手斜となり、「波の打物二打三打」半ば開
いた軍扇を上にかざし、下斜にさして「いで
や組まん」と、サツと右に渡して開いた軍扇
を胸に當て、左手をその上に大きく抱へ込ん
で「馬上ながらむんずと組み」となり、「兩馬
が間に」上半身を左にひねつて右ひざを立て
かけ軍扇と左手とを平に上にかざしてから右
に交はすと共にトンと右ひざから突いて軍扇
を下に向けて左手をそれに添へ押へた形にな
り首は藤の局の方くひねつて見上げる。

藤の局は驚いて「サア其武者を組敷いてか」
と思はず尋ねる。形を戻した熊谷は首を下
「されば御顔をよく見奉れば」軍扇を開いて
前にして見下し「鐵葉黒々と細肩に」眉を一
杯に上げて十分の肚を遣ひ「年は」正面向ふ
を見やり「いざよふ我が子の年ばい」下手の

相模を見返つて氣を換へ軍扇をサラリと開き
右手にかざして相模に氣どられないやうにし
て「定めて二親ましますん、其歎きはいかば
かりと、子を持つたる身の……」相模の方へ
引目をして、身體を震はせ乍ら十分のウレヒ
を見せておいて「思ひの餘り」が済んで左手
に太刀をとり上げ「上帶取つて取立て」先づ軍
扇でその柄頭を下から煽るやうに次に太刀を
返へして鎧を上からはたき、太刀を戻して、
自分の右膝を二度に拂ひ「塵打ち拂ひ」で太
刀を前に横に用して、軍扇を持ったまゝの右
手をその柄に添へて「早や落ち給、」といふ
相模が「と勤めさしやんしたか」と口をは
さむので、熊谷はその方へ首をひねつてから
「早や落ち給へと勤むれど、イヤ一旦敵に
組敷かれ何面目に存へん、早や首取れよ」熊
谷と局を見返るが直ぐ氣を換へて、サツと軍
扇を開き、その手を伸して左の頬にかざして
左の脇を張つて軍扇の地紙を外側から押へて
局の方から見られないやうにして、局の詞、
「ナニ首取れというたかいの、健氣な事をい
うたなう」の間、局の方へ引目で、眉を一杯
に引上げて十分のウレヒを見せる。軍扇を下
して閉ぢ「サア其仰せにいと猶、涙は胸に

せき上げし」軍扇を胸に當て眉をあげてウレヒ「まつ此の如く我が子の小次郎」軍扇に向ふを差し「敵に組まれて命や捨てん」眉を上げて身體を大きく揺つて「淺ましきは武士の」再び左に太刀をとり上げ「習ひと太刀も」トンと右足を踏出して左にかゝり「拔兼ねし、左脇にその太刀を抱へ込んで、柄に右手をかけて眉を上げてトン／＼／＼と足拍子を入れて、絃のつて心の苦しきを見せ、とゞ右足を戻し上手斜になつて太刀を左肩に立てかけ兩手をかけてトンと力なく首を垂れる。と氣を換へて「逃去つたる平山が」下手後をふり返り、上手後をふり返り「後の山より」右足を三段に踏み落し、右の軍扇を開いて地紙の方を左手に渡し前に下げ、右手の脇を折つて掌を頸の下に支へる形に持つて來て眉を一杯に引上げて寄り目に向ふを睨んで太きく見得となるのが「聲高く」一杯である（ツケ）。形を戻して「熊谷こそ教盛を組敷きながら助くるは、二心に極りしと呼ばはる聲々」軍扇を半ば開いて輕くかざしてから「エ、是非もなや」首を右へ傾けて垂れ「仰せ置かるゝ事あらば」軍扇の要の方を兩手持つて前にして、頭を下げ「言傳へ參らせんと

申上ぐれば」となり「御涙をうかめ給ひ」と顔を仰向け、左手を靜かに目に移し涙を押へ右の軍扇をひらいて、その上から掩ふ。軍扇をとじつゝ下して「父は波濤へ赴き給ひ」正面向ふを見やり「心にかゝるは母人の御事」トン／＼と下手斜になり、閉じた軍扇を右肩の邊に懸て、弱し左手は前につき出し左上を見上げるのが「昨日に變る雲井の空」で、形をといて「いかゞ過行き給ふらん」と左手を左へ渡し乍ら正面となり、更に上手斜に身體をひねつて、軍扇を左ひざに突き兩手を重ねて顔は正面にまはして來て「未來の迷ひは一つ」とウレヒで首を垂れるが、正面となつて「熊谷頼むの御一言」で軍扇を輕くかざして下し「是非に及ばず」トンと差添への柄を軍扇で叩き「御首を」と下手の相模を見返りトンと足拍子を入れて右の軍扇を前に突出しておいて氣をかへ、グルツと左へまはつて後向けとなり泣き上げて、開いた軍扇を震はせ乍ら顔の上を掩ふ。

相模が藤の局の嘆きを慰めるので「諫めに熊谷」で首を深く垂れてゐた熊谷が、下手の相模の方に向いて「をゝでかした／＼」と首を左からまはして來て「コリヤ女房、御臺所

左手で局を指差し「……此所に御座あつてはお爲にならぬ」首を左からまはして「片時も早く何方へも御供せよ、我も……」右手で右ひざの座を拂ひ、左手で左ひざを拂ひ、もう一度右ひざを拂ひ「教盛の御首實檢に供へん」と左に太刀をとり「ヤア／＼」右ひざを立てかけて腰を浮かして左の太刀を前に横へて持ち、上手の間を見込んで「軍次はをらぬか」と云ひ「早や參れ」と東に立ち、左ひざをあげてからトンと下して極ると、上手の局が懐劍に手をかけて氣色ばむので、熊谷は右手で制し、「呼ばゝる聲と諸共に」上手へ入れ替つて下手に向くと、局が何も意氣込むので、真中に相模が膝をついて止め、立身の熊谷は右手を頂いて頭を下げ「一間……」トン／＼と上手向きとなり顔を正面へまはして眉を一杯にあげて思ひ入れがあり眞上手向きに東に極つて「エ、ハ、ハ、ハ」一杯に上手の障子の内に入る。（完）